会報No 459

子どもの本 研究会

【私の一冊】『逝きし世の面影』 渡辺京二 著 （葦書房）

吉村 隆之

学生時代は見知らぬ国々とそこに暮らす人々に興味があった。日曜日の楽しみだったテレビの旅番組「兼高かおる世界の旅」に影響されたのか。大海原の先にどんな世界が広がっているのか若者なら誰しも興味を抱くことだろうが。大学に入ると映画研究部に入り、1年に100本以上見たこともあった。フランスのヌーヴェルヴァーグの旗手、ジャン＝リュック・ゴダール監督やスウェーデンのイングマール・ベルイマン監督の作品に心酔した。そのころよく耳にした〝西洋かぶれ〟だった。

しかし、そんな経験があったからか、40代に入り手にした渡辺京二氏の『逝きし世の面影』（初版・1998年）との出会いは、西洋かぶれにはとても新鮮だった。

「私は日本に着いて二週間後に大胆にも述べたことを繰り返すほかない。すなわち、よき立ち振る舞いを愛するものにとって、この〝日出る国〟ほど、やすらぎに満ち、命をよみがえらせてくれ、古風な優雅があふれ、和やかで美しい礼儀が守られている国は、どこにもほかにありはしないのだということを」（エドウィン・アーノルド）。この著は明治維新前後から日本を訪れた外国人100人以上の日本評を集めた。もちろん、日本への称賛ばかりではないが、純朴な庶民の暮らしぶりに驚愕の言葉は尽きない。

「私はこれほど自分の子どもに喜びをおぼえる人々を見たことがない。子どもを抱いたり背負ったり、歩くときは手をとり、子どもの遊戯を見つめたり…」（イザベラ・バード）、エドワード・モースは、「隅田川の川開きを見にゆくと、行き交う舟で大混雑しているのにもかかわらず、『荒々しい言葉や叱責は一向聞こえず』、ただ耳にするのは『アリガトウ』と『ゴメンナサイ』の声だけだった」という。「かくのごとき優雅と温厚の教訓！」と書き残している。

そこには風土に培われた日本人の日常生活が列挙されている。近代化の波に飲まれる以前の「古き良き日本」だが、幼いころを振り返ると、その名残が息づいていた。ここ数年、急拡大した外国人観光客からも、私たちは気づきにくい「日本や日本人のありのままの姿」が語られることがあるが、渡辺京二氏は今から30年近く前、そのことを世に知らしめていたことになる。

（くまもと漱石倶楽部会長）

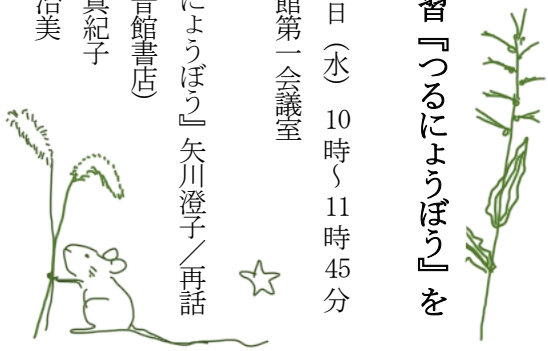
2025年 9月24日（水）特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 発行

https://www.kodomonohon.org E-mail: info@kodomonohon.org

講座報告

公開講座事前学習『つるにょうぼう』を読む

日　時　7月16日（水）10時～11時45分
会　場　青年会館第一会議室
参加者　14人
課題本　『つるにょうぼう』矢川澄子／再話　赤羽末吉／画（福音館書店）
担　当　堀畑真紀子
読み聞かせ　西坂治美



昔話の人物にそなわる正直性と慳貪（けんどん）性の観点から「鶴女房」を考える。昔話では、一人の人物が一つの性格を表す。しかし、「鶴女房」では一人の若者が正直性と慳貪性を併せ持つ。いわゆる心変わりである。初期の「鶴女房」では、若者が「見るなの禁」を犯すのは好奇心からである。しかし時の経過とともに、覗（のぞ）く理由（①何も食べずに織り続ける女房のからだを心配する②どのようにして織るのか不思議に思う）が語られ、欲（③もっとお金が欲しい）も加わる。更に、①②③に第三者の介入（④周りの人間が覗くように唆（そそのか）す⑤周りの人間が金儲けをしようと唆す）が付加され、金への執着心（⑥たくさんのお金が欲しい）も強くなる。こうして正直な若者が慳貪へと変化する。

一方、鶴の異称「田鶴」について、山折哲雄は常世に住む鳥で、元は人間の魂を運ぶ「白鳥」を意味するとし、鶴が神に近い存在であると述べる（『日本を知る101章』）。本昔話では、神格を持つ鶴の現し身（うつしみ）である女は、「見るなの禁」を犯されると機織りを途中でやめて飛び去る。しかし時を経ると、女の残念な思い（⑦織りかけたものを仕上げて暮らしを楽にさせたかった）が加わる。更に、覗かれても布を織り上げ、若者に対する愛情（⑧もっと一緒にいたかったといって悲しむ）が付加される。これは、神に近い存在である女が人間に近い存在となったことを表す。

以上のような若者の変心、女の神格性から人間性への変化は、木下順二の戯曲『夕鶴』（『婦人公論』1949年）と絵本『夕鶴』（新潮社1951年）の影響が大きい。木下は戯曲の執筆動機で「つうを一人の女としてこの男と幸福な生活をつくりあげるべく……与ひょうを訪れた。……しかしその希望が実現されぬと分かったとき、与ひょうを愛し続けながらも……去って行く」（『鶴女房』から『夕鶴』へ）と述べる。首藤基澄は、つうを「日本人が長い伝統の中で培い、冀（こいねが）った憐み深い人間の理想像で、俗なる者を許し、こころを癒す存在」（『方位』第20号）と位置づける。このつう像が、日本昔ばなし絵本「つるにょうぼう」「つるの恩返し」に多大なる影響を及ぼしていると考える。

【参加者の感想】昔話をベースとする『夕鶴』は日本人の感性に合うが故に、絵本に影響を与えたのであろう▼昔話は語り継ぐ人で変化する。絵本や語りに『夕鶴』の影響があるのは、人々がそれを受け入れられたということであろう▼中・高校時代、『夕鶴』がよく演じられていた▼昔話の定義は分からないが、『夕鶴』に影響を受けた話も昔話と考えてもよいと思う▼矢川・赤羽版は情感があり、通常の昔話と違うと思っていたが、その理由が分かった▼昔話から創作が生まれていることを理解した▼矢川・赤羽版を読み聞かせした時、『夕鶴』との違いを質問され、創作か否かと答えた▼本当の自分を隠している人は、それが明らかになると去る。鶴女房も同じ▼今は「罰が当たる」と言わなくなった▼矢川・赤羽版の美しい情景に

共感▼矢川・赤羽版に切なさや美しさを感じる。が、鶴の呼称を「むすめ」より「おんな」とした方がよい▼「鶴女房」と「雪女」が重なり、はかなく美しい話は日本人の感性にあう▼「鶴女房」を借りる小学生が多い▼「鶴女房」の奥深さを知った▼山形の珍蔵寺が「つるの恩返し」ゆかりの寺院とある。

（報告　堀畑真紀子）

講座報告 ボランティア活動研修

日　時　8月20日（水）10時～11時45分
会　場　熊本市民会館シアーズホーム
　　夢ホール第1会議室
参加者　13名
担　当　辻田美、古上美智代、木村一惠

●語り

「子育て幽霊」
『日本昔話百選』（三省堂）より　黒田真由美

●参加型絵本紹介（読み聞かせ・木村、古上、辻）

『でてこいミルク！』
ジェニファー・A・エリクソン さく／オラ・アイタン え／うちだりさこ やく（福音館書店）

『あーといってよ あー』
小野寺悦子 ぶん／堀川理万子 え（福音館書店）

『なぞなぞ』
安野光雅 さく／え（こどものとも２０２１年３月号）

『まどのむこうのくだものなあに？』
荒井真紀 さく（福音館書店）

『ケーキになあれ！』
ふじもとのりこ 作（ＢＬ出版）

『ふしぎなナイフ』
中村牧江・林 建造 さく／福田隆義 え（福音館書店）

『ふーってして』
松田奈那子 作（角川書店）

「だだずんじゃん」
『だだずんじゃん』川崎洋 詩／和田誠 絵（いそっぷ社）より

『へんしんトンネル』
あきやまただし 作・絵（金の星社）

【参加者の感想と意見交換】

聞き手も一緒に声を出す参加型絵本は楽しい。子どもたちと一緒に遊んでいるような雰囲気で会場が和み、お話がより深まるのでは▼子どもたちの集中力が高まり、繰り返すことで楽しみが湧いてくる▼本の言葉を唱えながら、子どもは自分の気持ちなどをどう表現したらいいのかを、学んでいくことができると思う▼読み手が軽快に表現すると、子どもたちのいい反応が引き出せる▼日本には紙芝居もあり、聞き手とやりとりする文化があるのではないかと思った▼『まどのむこうのくだものなあに？』は夏向き。絵の力も大きく、くだものの世界が広がっていく▼『ケーキになあれ！』は、好きな食べ物のお話が広がる▼『ふしぎなナイフ』は、子どもにとても人気。小学校で読むことが多く、読み方も工夫している。参加者の発想から出てくる言葉を、「それもいいね」と肯定するのは大切だと思う▼「だだずんじゃん」は、川崎洋さんの詩と、和田誠さんの絵がとてもいい。作者がうまく言葉を作り出している。一人一人、それぞれの「だだずんじゃん」みたいな言葉があるのではと思った▼楽しいお話や参加型の絵本を知ることができてうれしかった▼「子育て幽霊」のお母さん幽霊が子どもを育てたいという一心の思いは、やはり、語り（言葉）でないと、なかなか伝わってこないものがあるのではと思った。→「子育て幽霊」の語り

を聞いて、やってみたいと懸命に覚えた。お話や絵本を届ける活動は、長く続けると聞き手や話し手の心が安定してくると思う▼「子育て幽霊」に出てくる昔のお金の単位「一文」は、今の子どもたちに通じるのか？→分からないと思う。聞かれれば答える。お話の中の鍵（かぎ）となる言葉でなければ、多少の分からない言葉は説明なしでも大丈夫だと思う▼お母さん幽霊が飴を買うとき差し出す「桐の葉」は神聖な木で、お母さんの相手の男性が分からない事からも、異類婚姻譚のお話だと思う。相手は神様ではないかと思った。

※　※

支援学校等での活動状況についての意見交換もありました。

（報告　益田勝行）

報告 第11回「子どもと大人の読書会」

課題図書『グレッグのダメ日記』

（ジェフ・キニー作、中井はるの訳、ポプラ社）

日　時　7月20日（日）午前10時～11時

場　所　オンライン会合（ＺＯＯＭ）

参加者　8人（小学6年女子3人▽大人5人）

司　会　興津　暁子

子どもが選んだ本を楽しむ「子どもと大人の読書会」。今回の課題図書は、『グレッグのダメ日記』。２００７年（日本では２００８年）発行の第1弾（今回の課題図書）から最新版の第19弾まで全世界で70言語に翻訳され累計販売部数が2億９０００万部を突破する大人気シリーズ。子どもたちの感想から人気の理由が明らかになっていった。

★　★　★

子A　学校で一時期流行っていたので読んでみたら内容が独特で面白かった。印象的だったのは大人同士の場合、クリスマスでうれしくないプレゼントをもらっても喜ぶところ。自分にはそんな気遣いはできない。

大D　主人公のグレッグは何歳くらいかな。

大E　中学1年生くらいのようだ。

子A　来年、中1になる。男子はこんなふうになっているのかなぁ。グレッグの兄弟3人はそれぞれ考え方が違うし、男の子たちは変なことばかりしている。うちのクラスの男子も同じようなことを考えているかもしれない。だからみんなはこの本に共感したのかもしれない。

子B　グレッグとお兄ちゃんのロドリック、弟のマニーの3兄弟の性格が全く違う。お兄ちゃんは夏休み2日目にグレッグをだまして真夜中に起こし、父さんに叱られるように仕向ける。弟は、グレッグからクモのような糸くずで脅かされそれを誤って飲み込んでしまったとき、母親にその大きさを誇張して言いつける。グレッグも、幼稚園児をミミズで怖がらせたのは自分なのに、代わりに友だちのロウリーが叱られても名乗り出ない。事実が明らかになるとロウリーに裏切られたと考える。それぞれ凄い性格。

子C　学校劇（オズの魔法使い）のエピソードが面白かった。「木」の役の3人は歌うのをやめ、ドロシー役の女の子はりんごを投げつけられ、結局、劇は中止になる。ハロウィーンでも、お化け屋敷のノコギリ男が怖すぎて、母親が「やりすぎ」と怒ったり、グレッグとロウリーが3時間で１５２軒の家を回る予定を立てたりするなど不思議な箇所がたくさんあった。

大E　よくぞ日記にこんなだらしないことを書くよね。自分のせいで親友のロウリーが犯人扱いされたときも「いい勉強になっただろ」と罪をかぶせる。ロウリーもさすがに怒るが、すぐに仲直りする。別シリーズの『ロウリーのいい子日記』を読むと、ロウリーはグレッグに翻弄されつつも一緒に遊ぶのを楽しんでいる。子

どもの関係ってこういうものなのか？

大D　ミミズ事件のとき、ここでグレッグが初めていい子になって本当のことを言うのかと期待したけれど期待はずれ（笑）。

大F　優等生からかけ離れたダメ男くんの話をクスクス笑いながら読み、自由な気持ちになった。グレッグがロウリーを裏切る箇所は、著者がどういう展開にするか興味津々で読んだら、グレッグは「ロウリーは貴重な勉強をした」と、完全に自分のことを棚に上げる。最後はロウリーをかばって仲直りとなるが、そこもありきたりな友情話にはせず軽いタッチが貫かれている。このあたりが人気の秘密か。

大G　グレッグは自信満々で自己肯定感が強い。根拠なき自信がトラブルを生み、それが予想外の展開をしていくところが面白い。この本には風刺がある。学校の全体集会で「このままのボクが最高」という映画を見たとき、「この映画は今の自分に満足し、自分を変えるべきじゃない、と言うけど、そんなのを子どもに伝えるのはアホ。とくにうちの学校ではね」と皮肉る。禁煙運動のポスターで1等賞を取るのは1日に1箱タバコを吸う子だとか、いたるところに風刺が散りばめられている。子どもを美化していない。子どものあくどさも描いている。

大H　いちばん笑ったのは、保育園児にビキニ姿の女性が載る雑誌を見せたロドリックへの罰としてお母さんが質問リストをつくり、答えを書かせる箇所。登場人物の中でお母さんだけが表情が分からないように描かれているのも興味深かった。男の子にはお母さんが何を考えているか分からないかも。

子A　確かにそうかも。

大H　子どもたちが一方的に話し、分かり合おうというシーンがないのは気になった。

大G　（読書会メンバーの）子どもたちは「兄弟3人の性格が強烈、自分のクラスの男の子たちも同じような変なことをする」と言っていた。まさにそこがこの本の受けているところでは。

大H　子どもたちに受けているのは、グレッグたちが本音を言っているからか。「あるある」と思いながら読んでいるのかも。

大D　子どもたちは「あるある」と思って読んだ？　それとも「ないない」？

子A　どっちもある。さすがにないと思うところもあったし、あるかもと思うところも。

子B　「ないない」だけれど、学校でレスリングをやったり、ハロウィーンでお菓子をもらったりするのは自分もやってみたい。

大G　『アンパンマン』は、ばいきんまんがいるから面白い。子どもは教訓が嫌い。それを壊すばいきんまんやドキンちゃんを好む。それとこの本の人気の理由は似ている気がする。

子B　アンパンマンもカッコいいけれど、ばいきんまんの「はひふえほー」というところが好き。学校ではちょっと悪いことをすると先生に怒られるし、外遊びでも「ボール遊び禁止」などと遊ぶ場所が減っている。だから好き勝手するキャラクターに惹かれる。

子A　ばいきんまんがいるからアンパンマンが面白いように、学校も悪いことをする子がいるから面白みがあって楽しい。この本もグレッグが悪いことをするので面白い。

大D　本に教訓や感動を期待するところがあるが、この本にはそれが最後までなかった。本に教訓を求めたらいけないのかもと、ちょっと反省。でも、ミミズ事件でグレッグがロウリーに謝らなかったのはショック。

子A　裏表紙にシリーズ各巻のタイトルが載っている。第3弾の「もう、がまんできない！」など本音をズバリ言っているところがいい。

（報告　横田恵美）

◇活動報告

おはなしボランティア「びわの木」

おはなしボランティア「びわの木」は、県立図書館や市立図書館、学校、学童保育などさまざまな場所を訪ね、子どもたちにおはなしの楽しさを伝えています。その活動に昨年から携わるようになった飯冨美雪さんに活動の魅力を綴ってもらいました。

※ ※ ※

現役の幼稚園教諭の時から、熊本子どもの本の研究会の活動が新聞等で告知されるたびに関心を持っていました。ですから退職を機に、すぐに入会しました。そして、入会直後に図書館での読み聞かせのお誘いをいただきました。

実は研究会が読み聞かせのボランティアを長年続けてきたことを知りませんでした。それでも、保育の時間に子どもたちに絵本を読むことは日常茶飯事でしたから、全く抵抗なしに参加することにしました。

そして読み聞かせデビューの日がきました。場所は「こども本の森熊本」の一角。小さな可愛い椅子が並んでいます。明るく柔らかい光が差し込んでいます。「皆さん集まってくださるかしら」。そんな心配はいらなかったほどに、すぐに席は埋まってしまいました。

保育の現場なら、子どもたちはその本に興味がなくても、先生に怒られるといけないので、きちんと聞いているふりをするかもしれませんが、ここは自由な場です。面白くなかったら、保護者にぐずって、もっと面白そうな場に行けばいいのです。「まずいな、みんないなくなったらどうしよう」。私は変な緊張感を持ってボランティアの時間を迎えました。

おはなし会はとても静かに始まりました。ご一緒したのは、おはなしボランティアを長年続けている先輩ばかり。皆さん、とても落ち着いていて、絵本だけではなく、わらべうたを歌ったり詩を読んだりと子どもたちを飽きさせない工夫をしていました。

さあ私の番です。自分なりに子どもたちの心に響くようにゆっくりとお話を語ったつもりでした。そしてなんとか私の時間が終わりました。子どもたちにさよならを言ったあと、先輩方にアドバイスをいただきました。「本が傾いていて、後ろの子どもたちには見えづらかったかもしれない」「小さなささやき声は、雰囲気はいいけれど、参加者の耳には届いていない」など的確なアドバイスです。これは初めて研究会に参加した時の「おはなし会研修」で聞いていたことでした。「私は仕事でずっと子どもたちに絵本を読んできたからやれるはず」と天狗様になっていたのです。これまで保育してきた子どもたちにも謝りたい気持ちが湧いてきていました。

さて2度目は今年7月、市立図書館での0～1歳児対象のおはなし会でした。3組ほどの親子の前で絵本を読みました。それぞれ可愛い笑顔でお母様の胸に抱かれて、幸せそうに絵本を見つめてくれました。こうした時間の積み重ねが子どもにとって自分は愛されているのだという自己肯定感につながっていくのでしょう。その場に立ち会えたことに感謝するとともに、ボランティアをしていく責任感を強く感じました。

今年度はあと4回、私の担当する日があります。どんな子どもたちに会えるのか、今から楽しみです。自分のためではないかもしれないけれど、必ず何かが得られるこのボランティアを、誰にとってもよい時間にするように、丁寧に心を込めて努めていこうと思います。

（飯冨 美雪）

ご寄贈ありがとうございます

作家の木野かなめさんが近著『アイドルグループの作り方！』（ステキブックス）を熊本子どもの本の研究会に寄贈してくださいました。作家・木野かなめの誕生に研究会の活動も少し関わっています。その経緯や読書について木野さんに綴っていただきました。

読書の創造性

今から4半世紀前、「熊本子どもの本の研究会」は読書感想文を公募されていました。全国から感想文を集め、一冊の本『子どもがみつけた本』として出版する取り組みです。当時高校生だった私はこの公募に応募しました。私は小学生の頃から小説家になることを夢としており、自分の文章が本になったらすてきだと考えたからです。幸いにも採用され、『生きるんだポンちゃん』という絵本に関する感想文が掲載されました。その時の喜びは何物にも代えがたく、自分の夢を叶えていきたいという思いがいっそう強くなったことを覚えています。

しかし大学受験、就職活動と人生を進めていく中で、私は執筆に着手しませんでした。夢だけは一人前に語るのに現実が伴わない。そんな状況が続きました。ですが新社会人になった2000年代、私はライトノベルというジャンルの文学に出会いました。中高生に向けて書かれた小説のジャンルです。そこでは、全てが自由でした。SF、ファンタジー、バトル、現代ドラマ、怪奇もの。文体すら問わないありとあらゆる種の物語が、並行して新しい世の中をつくっていったのです。私は空き時間を使ってライトノベルを楽しむようになりました。すると不思議なことに、これまで止まっていた「執筆」という行為がすらすらと動き出したのです。

30代になった私は、ライトノベルの文学賞に応募するようになりました。それからふとした御縁で出版社様と知り合い、今年2月に『魔女のお茶会』、7月には『アイドルグループの作り方！』という小説を上梓し、ついに夢を叶えることができたのです。小説を書くようになってから出版までは10年の年月を要しました。その間、様々な長編小説を仕上げてきました。チャレンジを続けられたのはひとえに、熊本子どもの本の研究会の本に載せていただいた体験が背中を押してくれたからだと思います。

もう一つの要因は、私がライトノベルと出会い、読むようになったことだと考えています。現代では、映像や動画文化が幅を利かせています。子どもが読書をする習慣も減り、わかりやすく刺激に満ちた動画が増え続けています。もちろんそれらの動画もまた、優れたエンターテインメントだと思います。しかし読書ならではの特性も忘れてはなりません。読書においては、自分でページをめくります。自分のスピードで、自分の理解とともに、自分でページをめくっていくという作業が必要になります。これはすなわち、創造ではないか、と私は思うのです。読者自身が筆者とともに物語をつくっていく行為です。私がライトノベルと出会い、この創造的行為を増やしたからこそ、執筆を加速させることができたのではないでしょうか。

これからの時代においては、いっそうの創造性が要求されます。そして同時に創造とは、生きていく中で最上の喜びの一つです。私は読書という名前の創造が、これからも子どもたちの輝きとともにあることを願ってやみません。そして私自身も、未来の子どもたちのために物語を紡ぎ続けましょう。自分の得られたことを、そのまま社会へと返していきましょう。物語という七色のバトンを、子どもたちに渡していきますね。

（木野　かなめ＝作家）

10月～11月の活動の案内

○講座　幼年童話　絵本から物語への架け橋

日時　10月15日（水）10時～11時45分

場所　熊本市立図書館集会室（予定）

○講座　公開講座事前学習『かさじぞう』を読む

日時　11月19日（水）10時～11時45分

場所　熊本市立図書館集会室（予定）

＊会員外の方も５００円で参加できます

講座申込アドレス　kouza@kodomonohon.org

○子どもと大人の読書会(オンライン)

日時　10月5日（日）10時～11時

課題図書『クローバーと魔法動物①　運のわるい女の子』（ケイリー・ジョージ作）

○研究会活動検討会（オンライン）

日時　10月5日（日）11時～12時

＊申込アドレス　zoom@kodomonohon.org

○おはなしボランティア「びわの木」

9月26日(金) 13時～14時半　江津湖療育医療センター

10月10日(金) 10時～11時　江津湖療育医療センター

10月24日(金) 13時～14時半江津湖療育医療センター

10月27日（月）13時～13時半

熊本大学教育学部附属支援学校（中学部）

11月1日（土）11時～11時半

熊本市立図書館（3歳以上）

11月12日(水) 10時～11時　江津湖療育医療センター

11月14日（金）10時50分～11時20分

熊本県立熊本支援学校

11月21日(金) 13時～14時半江津湖療育医療センター

○「びわの木文庫」貸し出し

スケジュールをホームページでご確認の上、来られる際は事前にご連絡願います。

https://kodomonohon.org/biwanoki/

本はともだち！

この夏、久々に楽しくかつ学びの多い本に出会いました。『僕には鳥の言葉がわかる』（小学館）という本で、著者の鈴木俊貴さんは、１９８３年生まれの動物言語学者（東京大学准教授）です。バードウォッチング好きの高校生だった著者は、鳥の研究者になることを目指して大学に入り、軽井沢での散策途中に見た出来事から鳥の鳴き声の研究にのめり込んでいきます。自然相手の研究だからこその新発見や世界の有名研究者達との交流話も楽しいのですが、一番面白かったのは、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」というシジュウカラの鳴き声が「警戒しろ・集まれ」という文になっていることを証明する部分です。「ヂヂヂヂ・ピーツピ」ではシジュウカラが反応しないというだけではなく、「ピーツピ・ディーディー」（「ディーディー」は、コガラの「集まれ」を意味する鳴声）と音声を流すと、警戒しながら集まってくることを確かめています。これは、「文章を作れるのは人間だけ」という古代からの決めつけを否定するもので、想定される反論を論破できる実験を尽くして投稿した論文は、海外のメディアでも高く評価されたとのこと。

研究者になることが身近なことで、研究者生活も楽しいものであるということに加え、動物言語学の最先端の研究や思考法について、中学生でもわかるような平易なことばで書かれている点が素晴らしいです。現在、研究者になるために博士課程に進学する日本人の若者が減っていますが、この本を読んだ若者達の中から研究者を目指す人が出てくるのではないでしょうか。他の分野でもこのような本が出てくると良いですね。

（横田　真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861－8029
熊本市東区西原1丁目15の24
電話　096（382）5090

ふるさと納税でのご支援もお待ちしています。